



学校だより

<http://www.sumida.ed.jp/ryogokusho/>

令和7年11月28日

墨田区立両国小学校

墨田区両国4-26-6

TEL 3634-7876



「ありがとう」で締めくくる一年

副校長 手山 晃洋

11月から12月に移り変わる今、澄んだ空気と街の灯りに、年末の訪れを感じる季節となりました。今年も残すところわずかとなり、「開校150周年」を迎えた本校の取組や、子供たちの成長を振り返ると、保護者・地域の皆さまからの大きなご支援と温かいお力添えをいただいたことに、改めて心より感謝申し上げます。この場をお借りして、「ありがとう」の気持ちをお伝えさせていただきます。

「ありがとう」の語源

さて、皆さまは、日常生活の中で「ありがとう」という言葉をどれくらい使われているでしょうか。調べてみると、「ありがとう」の語源は古語の「有り難し（ありがたし）」に由来しています。「有ることが難しい」、つまり「めったにない」「珍しくて尊い」という意味です。平安時代には「この世に存在するのが難しい」というニュアンスで使われ、後に仏教的な背景と結びつき、仏の慈悲など「得難いものをいただいている」という感謝の意味へと発展しました。そこから「ありがたく」が音便化して「ありがとう」となり、現在では一般的な感謝の言葉として広く使われるようになったそうです。

教育目標「心の温かい子ども」

「ありがとう」の大切さは、本校の教育目標である「進んで学ぶ子ども」「たくましい子ども」「心の温かい子ども」のうち、特に「心の温かい子ども」に込められています。日々の学年・学級での活動はもちろん、異学年の友達との交流を通して、他者を思いやる心を育むことを目的に、委員会活動やクラブ活動、「両小まつり」、「なかよし班活動」、「挨拶運動」、そして6年生による1年生のお世話など、様々な取組を行っています。こうした活動の中で育まれる「感謝の気持ち」や「ありがとう」という言葉は、円滑な人間関係を築くだけでなく、子供たちの自己肯定感を高め、心の安定にもつながります。

「当たり前」と「マインドフルネス」

一方で、私たちは日常の中で様々に起こる「ありがたい」ことを、「有り難い」と気付かずに「当たり前」として受け止め、「ありがとう」の言葉を忘れてしまいがちです。脳科学の第一人者である茂木健一郎さんは、ご自身の著書の中で、この「当たり前」に気付くことの大切さを「マインドフルネス」の考え方を通して語られています。「マインドフルネス」とは、「今この瞬間」に意識を向け、ありのままを受け止める心のあり方です。忙しい毎日の中で、私たちはつい「次にやること（不安なこと）」や「過去の出来事（失敗したこと）」に心を奪われがちです。しかし、周囲の人の笑顔や、家族との何気ない会話、地域の方との挨拶など、目の前にある小さな出来事に気付き、感謝することができれば、心は穏やかになり、より豊かな時間を過ごすことができます。

年末こそ「ありがとう」を

年末は、一年を締めくくる大切な節目となります。「師走」という言葉の通り、何かと慌ただしい時期ではありますが、ご家族やご親戚、ご近所の方々と集う機会も増えることと思います。ぜひこの機会に、「ありがとう」の気持ちを言葉にして伝え合い、心温まるひとときをお過ごしください。両国小学校としましても、子供たちが「この学校に通えてよかった!」と感じられるような学校づくりに、来年も全力で取り組んでまいります。少し早いご挨拶となりますが、どうぞ、良いお年をお迎えください。

